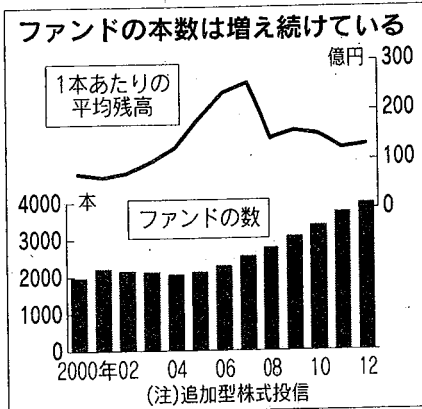


金融商品 選ぶカギ ——投資信託 ㊦

投資信託のファンドの本数が今年2月、初めて4000を突破した。2012年の1年間でも246本増えた。投信業界では1営業日に1本は新商品が登場する計算になる。全体の運用残高がそれほど増えないのに新ファンドが相次いだ結果、1本当たりの運用残高は昨年末で平均130億円と5年前に比べほぼ半

相次ぐ新ファンド



老舗含め長い視点で

短期で乗り換え

投信の運用会社や販売会社は、時流にあったテーマを設定した新商品を投入し

マネーの受け皿として定着しない。昨年1年間の投信の販売額が約23兆円だったのに対し、解約額も約22兆円にのぼった。短期でファンドを乗り換える例が目立

減した。海外に投資する需要が増え、海外の不動産投資信託(REIT)や低格付け債に投資するタイプなど、海外資産を組み入れるファンドはざっと2500本を超

「長い運用の賢明だろう。」

販売に力を入つ。08年秋のリーマン・ショック以降、従来型の運用で失敗した投資家の間で、新たな投資先を求めるニーズが高まったことも見逃せない。先進国を中心に経済危機が深まり、新興国へ分散する動きが個人の間でも広がった。その結果、ブラジルレア

運用実績を重視 一方で、業界では新ファンド偏重の販売戦略を見直す動きも出てきた。野村証券は3、4年前に比べ、投入する新ファンドの数を4分の1程度に絞っている。営業部門を担当する森田敏夫専務は「投信の品ぞろえは豊富になった。既存の商品から顧客ニーズや市場環境にあったものを提案していく」と話す。投信の窓口販売を手掛ける地方銀行でも、中長期に好な成績を残している老舗ファンドも含め、自分の運用目的にあった投信を探

える。ファンド数の増加は個人マネーの運用資産の多様化の副産物でもある。実績がある老舗ファンドも積極販売され始めている」(投信調査会社リッパ・ジャパン)という。目新しさを追求するあまり、複雑な仕組みのファンドが増えたことで、分かりやすい既存のファンドに関心が向かっている面もある。その時々々の流行の投資テーマに沿った新ファンドを買ったことが、必ずしも高い運用成績につながるわけではない。ファンドの乗り換えを繰り返せば、支払う販売手数料も膨らみ資産形成にはマイナスだ。長期投資を考えると、中長期に良好な成績を残している老舗ファンドも含め、自分の運用目的にあった投信を探